



備 考

新 集

秋 冬 苑

田



俳諧新選卷之三



平安

太祇

嘯山

輯

秋部

立秋

初秋

秋來ぬと合点入りける嚏式 蕪村

女孺達の物言ひやと物言ひの秋 雁宕

蒸らうくはく瓢やと物言ひ 青魚

おちろの初ハツ天初ハツやハツなれハツ茶雷

武タケ鳥トリ水ミヅとトくクさサ一ヒト身ミ名ナ林リンのノ風カゼ吞クハ<sup>李山</sup>那

鳥トリ群グンくク何ナニ向ムカくク様サマやヤとト鳥トリのノ林リン羽律

秋アキまマぬヌとト目メ小コまマまマまマれレ垣ケもモ引ヒ田福

初ハツ林リンやヤ夕ユフ立タテとトしシもモ秋アキのノ雨アメ太タ祇

柗散 桐散

友トモ初ハツ家カ柳リュウやヤ初ハツくクおオとトとト嘯山

一ヒト葉ハらラりリくク初ハツくク白シロのノ子コやヤ溪キのノ水ミヅ素竹ソノケ

おオちチまマくク指サシまマもモらラかカ柳リュウのノれレ喜朝

白シロ小コすスしシ日ヒハハひヒやヤらラるル柳リュウ引ヒ雉羽

桐キナンドのノ葉ハ乃ハ心ココロひヒあアまマふフ友トモまマりリ鯨童

二ニ日ヒ月ツキらラるル初ハツ桐キナンドのノうウ了リ千仞

風カゼ音ネくク柳リュウ友トモをオんン夕ユフくク柳リュウ土髮

垣ケをオりリゆユるル此コノ名ナやヤらラりリ柳リュウ雅因

五イ友トモ初ハツをオ柳リュウにニ柳リュウまマりリ太タ祇

らラくクとト初ハツをオ柳リュウにニ柳リュウまマりリ一ヒト葉ハのノれレ菊キク色イロ

非皆新選 水

らる程はほろいある柳か 水翁  
らる葉をたふらるる柳か 麥翅

七夕

福を授けよとせよとて河 宋屋  
川のいろはを星にま向ふ 三 李牧  
鶴やそれの傍々あねと 今 素園  
七夕や妹の唱い 況句せん 中 浮白  
早々や樟脳白ふか 小袖 同 如江

銀の灯と妹の影の中 中 萬翁  
おの晴るま端なれと 大 瓢水  
ト書と縁乃を中 存 存義  
藤よりとくま 中 篤羽  
面よりと早 中 習先  
七夕や對の娘よ 太 太祇  
七夕よ 大 大行 珪琳  
よ 雁 雁嘴

我々... 召波

箱妻

抱るよ小箱妻のせはる 貝錦

箱妻と傘をてねのむら 志原 隣水

箱妻や母の橋れ下さ 孤桐

さうゆや燈のくさるほり 之房

箱妻と溜る春をく 春爾

苔滑くさう海はく 習先

月と霞箱妻もらふ 舞閣

さうまや杉のさう樹のふ 山 嘯山

箱妻とねる 山 石爛

さうゆやわら 山 三力

さうゆや心 山 几董

箱妻 山 麻兄

箱妻 山 竹友

さうま 山 無名氏

裸身 <small>ハダカ</small> の <small>ハダカ</small> の西清 <small>ニシキヨウ</small> の <small>ハダカ</small> の式 <small>シキ</small>	土髮 <small>ツチカミ</small>
いさく <small>イサク</small> のや侍神 <small>シヤウジン</small> の <small>イサク</small> の鏡山 <small>キョウサン</small>	龍眠 <small>リウメン</small>
いさく <small>イサク</small> のや園 <small>エン</small> の <small>イサク</small> の <small>イサク</small> の仲 <small>ナカ</small> の <small>イサク</small> の <small>イサク</small>	旭扇 <small>アサアヒ</small>
稲妻 <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small>	琴臺 <small>キンダイ</small>
稲妻 <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small>	可壽 <small>カウ</small>
いさく <small>イサク</small> の <small>イサク</small> の <small>イサク</small> の <small>イサク</small> の <small>イサク</small> の <small>イサク</small>	三遊 <small>サンユウ</small>
稲妻 <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small>	子一 <small>コイチ</small>
稲妻 <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small>	和流 <small>ワリウ</small>

稲妻 <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small>	毛佛 <small>モツツキ</small>
稲妻 <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small> の <small>イナヅメ</small>	鯨童 <small>クジラドウ</small>
いさく <small>イサク</small> の <small>イサク</small> の <small>イサク</small> の <small>イサク</small> の <small>イサク</small> の <small>イサク</small>	<small>三原</small> 卷古 <small>マキコ</small>

踊

乳母 <small>ウチノメ</small> の <small>ウチノメ</small> の <small>ウチノメ</small> の <small>ウチノメ</small> の <small>ウチノメ</small> の <small>ウチノメ</small>	秋水 <small>シュウスイ</small>
子 <small>コ</small> の <small>コ</small> の <small>コ</small> の <small>コ</small> の <small>コ</small> の <small>コ</small>	胡餅 <small>コウヘイ</small>
ゆ <small>ユ</small> の <small>ユ</small> の <small>ユ</small> の <small>ユ</small> の <small>ユ</small> の <small>ユ</small>	赤羽 <small>アカハネ</small>
牛 <small>ウシ</small> の <small>ウシ</small> の <small>ウシ</small> の <small>ウシ</small> の <small>ウシ</small> の <small>ウシ</small>	梅仙 <small>ウメセン</small>

酒子の煮食し母れ給紅式	沙月
化人しち拍子のり又躍る	百池
祝くの中をまきしかちり	篤羽
酒くくし鳥入るけし酒小	百丈
又くくわなをまきと信く酒をん	自東
酒場し道水なりをさる	季遊
ふの踊るの踊よおさるきり	大夢
くらきとまきくけおらるわ	太祇

為力や門し移れ踊りき	銀獅
あくるさし踊られぬと山あ	吳雪
くうまるまきや踊れ花車	楮林
攝待	
松待や回と音中乃嬉し声	嘯山
松待れれのまきや二三遍	鶴英
魂祭 送火	
桐待やこれと源ハまき月	寛雷

泥系物此同之記火之けり	梅史
何れも志子傳や魚乃月	翠如
泥系者好まじし物や竹	子一
泥糊し打はも初れえり	吐月
泥糊し沸しさるぬらる	春來
而も其し控探するや口の中	青魚

一体の一一乃ちと初むる	沖三
又月の十二初より一六文字	存義
此此端し初る里もや大文字	宋屋
月くらふ初家糊や大文字	南浦
又月や一字同も初大文字	嵐山
りし生をこれ初の鬼系	百萬
初嵐	
初嵐はりのれと忘る	水翁



神代入吹こくまねの神嵐 一之

西瓜

うしひく女れ覚る西瓜式 凡号を思ふはち西瓜の神 春來

小こくくきく折く西瓜式 玉壺

破形や西瓜の末らぶく 太祇

薺

薺子と薺子せりく物云り 西宮 梅輝

薺や薺のちけ薺の薺さる 丑二

薺のや毎目さくしりく 富水

薺のや毎目さくしりく 富葉

薺のや毎目さくしりく 赤羽

薺のや毎目さくしりく 寛留

薺のや毎目さくしりく 百萬

薺のや毎目さくしりく 麻兄

薺のや毎目さくしりく 可風

薺のや毎目さくしりく 五柳

葦やうけきーるる原の原 三原 蘆角  
 船形や小つら役共のせりり 太 祇  
 船魚の船くはるり目れ白ひ 雲 魚  
 葦の船と押さく 熊内 乙 花  
 船魚のうらと入は 竹 房  
 葦乃及金く 竹 貫古  
 中浦人 鼓 舌

蜻蛉

蜻蛉の四羽えらり 嘯 山  
 娘乃葉も持結らるる 太 祇  
 舟のそゆく 李 流

芭蕉

ふうりやう 船色 杜 支  
 深き舟く 蓼 太  
 舟のそゆく 習 先  
 隅 竹 房

一葉をく一葉ふらののそはうか  
うれくくくくくくくくくく  
枝芳

露

白やこれ力乃く程やきれきけ  
母のやのきふくくくくくく  
李流  
白やち海に揚るふくくく  
嘯山  
川徑しづく白富きおれ  
雅因

おれくくくくくくくくくく  
素竹  
おれくくくくくくくくくく  
欠作者  
紫くくくくくくくくくく  
文素  
行例いおれくくくくくく  
毛佛  
くくくくくくくくくく  
大夢  
くくくくくくくくくく  
富水  
羊のくくくくくくくくくく  
赤羽  
おれくくくくくくくくくく  
孤桐

世のまはれ高しきわらふとみねる

郷今

灯笼

赤い色を斬り切らぬやうに致

東舟

言燈が燈のくされ油のぬ

溜北

言灯が高しき燈が暗きり

都夕

物も糸回し灯の回しきり

欠作者

角力

裸身とむしきく角力と

雪峯

傍らとて終るにきり角力式

旭扇

古の世に以てまぬすまき

蕪村

あけそくか男かえりす海か

杜支

身合ふももはる角力式

嘯山

禪の切くもきりし海か

孤桐

熱く炙て弓しきり角力式

水翁

心も折くす海かを致し

斗吟

海もそくしきり角力と

雅因

俳言集

いづれを親のわらふる角力社中  
二十とをいけけくすまうつゐ  
いづれを川のぬらう角力社中  
稲音

虫

虫の声や湖の曇りのけふ湖月  
冬掃除のせらぐねのけふ出の音  
あまきけい又やまきりり声  
野有  
野有  
嘯山

ゆふゆふ小冒舞のけふ出の音  
耳まきくちもやうん人乃音  
戸まのそほくねのけふ出の音  
出の音やふれらるるも物味  
待たざる定のけふやせれい  
とらぬねねもるめ出の音  
出たてふけふやけふも物味  
前はけふ物味もまのけふ  
左釣  
赤羽  
太祇  
喜水  
土髪  
都城  
移竹  
冷五

俳言集

尾張

俳言集選 和

口よと出小をせく素るもたり

大板 懷居

同らや音つらやしりの声

同 上 我

支燧乃襖ひそや出乃音

南雅

蚕 蟻 蟬

蚕鳴や河女の戸れゆるそ

麥翅

清糸る御廊の音もきりく守

孤桐

ゆきくも目といふしり 蚕

移竹

西江といはぬ音もきりく守

習先

寺中遠く椽の音もきりく守 二 桺

蚕溜りく音をわね 病 陸史

灯の音も座敷をきりく守 太祇

蚕やぬみれ花こつれあり 子曳

我撫くと路にたもきりく守 支鳩

音うたえ音もきりく守 嘯 山

回折にわもあつて音もきりく守 習先

端折も鳥の音もきりく守 其 化

俳言集選 和

三

端端のまゝはる工面より 嘯山  
烟の目とつらつら月夜にぬ 凡流

萩

萩のまの扱育も杖に接とけ 樓川  
萩のたれたれしもある蓋の那 貝錦  
白萩やとこれたれは推く咲 射牛  
萩の声乃れややせけやせけり 卯雲  
一萩よりさるも扱育はるれれ 太祇

萩のまの扱育も杖に接とけ 樓川  
萩のたれたれしもある蓋の那 貝錦  
白萩やとこれたれは推く咲 射牛  
萩の声乃れややせけやせけり 卯雲  
一萩よりさるも扱育はるれれ 太祇  
萩のまの扱育も杖に接とけ 樓川  
萩のたれたれしもある蓋の那 貝錦  
白萩やとこれたれは推く咲 射牛  
萩の声乃れややせけやせけり 卯雲  
一萩よりさるも扱育はるれれ 太祇

野の山に霧のふりさけり

嘯山

霧

朝霧や舟の波さくらん

練石

芳の白く雪のふりし

存義

ゆきもたけしき芳の麻ふ

麥翅

株のまじりぬき芳のふり

嘯山

ふりさけのふりし

支鳩

芳の芳のふりし

十友

人ときふ測らけし

蕪村

芳の山や大橋渡り

雅因

ひきく芳の山

里鳥

川原の芳の下

太祇

芳の山と

欠作者

花火

古裡工ま

其丸

同い

都城



打つてはるもくはるもく

嘯山

鬼灯

鬼灯やとく音ちる男の子

有我

鬼灯とせう人々共し

百萬

鬼灯やつとけしる袖を座

太祇

と山子や鬼灯照く御きり

交翅

鬼灯や條小文のわつとく

嘯山

案山子 鳴子

軽くゆるゆるかきうら

三耳

かきと親子あやしくもきり

文湖

きとゆる親仁の軽きかき

雅因

かしくゆる親けいさきり

雨遠

河田小ゆる勝もきり

毛佛

新山ゆの似合わかしら

貫古

金やそとかりしきり

賈友

さむるそ話のしらあかきり

孤桐

俳諧新選

七

よのひをひらくをきりし水	大夢
ふ風のぬめりほるかしお	雁宕
お月を自母やいしのまろ角	交翅
おのこししきやかしの人をく	習先
を <small>竹まふり</small> く <small>まふり</small> く <small>まふり</small> く <small>まふり</small> かし水	玉芝
けしの骨やうらみかしうら	春山
きもまきかきまはけりし水	它谷
おのぬるかきやまきしたまねこ	貝錦

くまかしの影や月くら	龍眠
まきまき果るかしのせり夜	し <small>岩</small> 總
まきまきお月をくまき	太祇
おのひをひらくをきりし水	宗雨
一ひら余の雨と波くまき	龍眠
おのひをひらくをきりし水	維駒
おのひをひらくをきりし水	彈月
まきまきくまき	嘯山

片断新選

七

糸とひ日東山に鳴子に系 蘆角

蓼 番故

柳邊に堤もく海を流るる 孤舟

海辺には美のまや 葉の衣 太 祇

肩のくびるく山も 太 祇

峯入

岩入の海邊をくくまのま 欠作者

山もやまのま手渡す手標るま 太 祇

女郎花

口ゆくきぬ花やとまら 超 波

昔は海邊にれ女郎花 雁 宍

女房も海に流るるま 嘯 山

山々くく一把にれ女郎花 蕪 村

草花 花野

今一里はく者らん昔のもの 如 水

昔は海邊に流るるま 李 流

俳諧新選 秋

秋	鳥	午	炊
斗のまはら	捨	石	
橘	友		
人	赤	羽	
振袖	止	角	
み	車	兒	
一	天	露	
秋	雪	蕉	

志昔  
喜招

秋風

龍	眠
柘	花
其	雷
素	園
雁	嘴

俳諧新選 秋

俳諧雜選 卷二 飛

こゝろをくちくちと鳴る鳥の風 儿董

鶉 鶉

耕牛の出るやわらわらや啼 新 雅因

西の鳥啼くやわらわら 西 灣

わらわらの鳥や啼くやわら 太 祇

わらわらや啼くやわらわら 文 水

わらわらや啼くやわらわら 習 先

新庄原の伸く啼くやわらわら 嵩 平

色 鳥 鶉

鶉の鳴るやわらわらや啼 榮 瀧

鶉の鳴るやわらわらや啼 超 波

鶉の鳴るやわらわらや啼 嘯 山

鶉の鳴るやわらわらや啼 嵐 方

月 名月 十四夜

月の光をくちくちと鳴る鳥 毛 佛

月の光をくちくちと鳴る鳥 蘆 角

鳥 二 火 三

俳諧集

飛

みゆふふ方遍り村の月 鼓舌

しづかな湯の侍の月のは 楓里

やまをよむる月のは藤えり 佛仙

業や路ののれれな一川 都夕

そむも獨り村ふるのや秋の月 カ小松 越蕪

やまをよむる月のは藤えり 嘯雨

此の海はけしめはるる月のは 野有

かたも白ふる月のは藤えり 野有

と目なふる月のは藤えり 大石

かたも白ふる月のは藤えり 希因

月 閑庄 井々

百程の月のは藤えり 富水

やまをよむる月のは藤えり 羽律

と目なふる月のは藤えり 太祇

と目なふる月のは藤えり 湖曉

と目なふる月のは藤えり 秋月 思覽

俳諧集

日

伴諸新選

五

のちりや満んくく御ら 嘯山

いづれきまの月 和流

名月や海すま一陸り多 尹周

名月や花の記きとあそん 淡々

名月や何とまき帆け船 貝錦

冥朝の心室あそみ家なごか 李院

紅の如くそまなな海に集 鶴英

源氏流は船根るに家の月を必 必化

嶺く鷹とさりふれ 可兆

名月や如とよれハ船清め 羅月

名月や月とまきくまきり 素園

名月や人々麻巻くもの声 涼徳

名月や世書を麻巻く月を 麗白

名月や地よもあも峰向 嘯山

名月や中の國もあふふの月 多少

名月や

俳諧新選  
秋

物まれば舟の月えり流  
此流

名月も少くも侍りとも  
日高社中

と合のありき終るなると  
胡餅

つらつらぬおしよの月  
蓼太

くく回守代の名もまの月  
青魚

名月もまの月も望みお見  
雲魚

こゝろと御の御やよの月  
文素

臥る月の月もあまやまの月  
興覺邦

鳥もをれぬえや糸の月  
樓川

水梨のものを満らん月と青  
涪北

名月つらけいん心新あし  
野有

遠く水も僕りある月と糸  
宋屋

名月や竹も若れ小者とも  
出羽鸞窓

名月や竹も若れ小者とも  
練石

折るる八坂の塔やうの月  
田福

あまの月とあまの月と糸  
太祇

月夜新選  
火

三



竹言孝道

取ひと肝と懐くく月と糸

珪琳

出らひ十六夜やいのまろき桂の石

紹廉

松の乳は日の月としき月又

流斜

松う枝よ未やわり十七夜

休粹

無月  
うばふらと月のえりえ懐ひほ

鳥僧允

野分

唐木のほりたえたる野分る

光甫

ちる女のこころ花きの形かうふ

花廬

大葉のたねはふれね野分り

樓川

灯と清き梅の多の形かうふ

菜根

川流のちりたる野分り

之房

又とと八海と明切る野分り

習先

改遂ねるを懐くる野分り

凡流

形かうくくさおしあやなく

尺布

まをらうてふれ流るる野分り

麥翅

まゆのこころ糸ぬる野分り

芦平雀

竹言孝道

竹言孝道

行も清く輝のふる家の町がけ 大夢	花とゆきしるる好まうな 白芽	野よりてしむ山より橋芝居 鼓舌	狗子の角うおとす野がうな 山外	かく繞る者も森ある好まうな 雅因	老のおの力なきの好まうな 玉志	花のく鳥ううのくくも 紫水	野よりて樹の葉も戸も流る 太祇
---------------------	-------------------	--------------------	--------------------	---------------------	--------------------	------------------	--------------------

砧

少引くも森入る小水砧 珍志	海より小舟の砧やうまき 志昔	海より小舟の砧やうまき 水翁	うきうきよあまうしるる砧も 蕪村	舟出の船りなる砧も 土髪	川喜ぶようくうる砧う那 千仞	及辺の守から橋もあまう砧も 嘯山
------------------	-------------------	-------------------	---------------------	-----------------	-------------------	---------------------

非香所遺二六

五二

子ら故屋よ寐せくまの砧石 沙月

子と空そ度る廊や何よ路 胡丈

女肩ハ未裕ともきぬこ 龍眠

衣のもまのはる乃行ぬり 之房

けこもあこはよ石の拍子うれ石 挑鏡

小ねあけく拍子の心む石さ 支鳩

宿借く妻出と中の石うね 孤桐

乳囉しのこま小代る石う那 雅因

ちくけくふつく石や壁 隣 移竹

砧まく夕暮もわり揚屋所 泉旭

鴈

初しよ國の訖はまる中ときり高 如石

初しや何らちやも飯旨 杜口

初しく見んハ堅の長うす 嘯山

すしきと極くるの海りり 菜根

初しや漆のを乃そら声 春來

伊言来遣

梅

袖丁もりの國よへる障子 梅四

静しと鳴く夢をいふ此丁 関更

丁の声を根へりてさしきり 土髪

棹の丁ひ未いさしとぬきり 柗浪

市塗や鳥いほりる丁の夢 <sup>五</sup>御風

人ほぬる山細やさる丁 太祇

飛とくし追ふる丁や鳴なう 音蒲

柗

市所臨よまの柗れ盛る 富葉

山おのゝ住りや柗 林 漁焉

ほ柗やまらこむ鳥門ちり 赤羽

ほ柗の赤地よ建よころぬ 旭峯

結る結るはくはう守柗や二所 太祇

柗をえふ柗の林とぬきり 晚平

ま柗や深よぬき悟る 尺布

おれあうくの工れ深ゆ斗 嘯山

伊言来遣

梅

柿うしく鳥も回ぬ心家なる  
周蛇  
うす柿の困も秋と送たり  
吏登

薄

あけつり風のかげすきる  
柗  
を里の灯と振るく落る  
文江  
えんりふ風うさるの落る  
赤羽  
まほすめ耳も落の落る  
五好  
ふぶちを枝をさぬ村はき  
之房

吹風もさ小押合すきる  
止角  
おの風や小松うさる  
太祇  
あしの尻もさる  
鳥石  
武蔵のやまをぬ出く落る  
枝芳  
らるる花初ぬをさる  
大夢  
らるる花初ぬも白けを吹る  
習先  
夕月の白髪もさる  
里泉  
いずもさる武蔵のやまをぬ  
高  
之

古今和歌集

七

俳諧雜選

夜寒 朝寒

起徒くる雨の洒きく秋を引イセ 宗夢

袖をさし物もふるく秋をさる 鷺喬

月をさし秋を小別れ舟の中 嘯山

雨あちの夜よいとし秋をうね 一計

候所のおき小をし溪の中 新莊 流

管あれくさてる星の秋を引 孤桐

欠くて月もたふさる秋をさる 蕪村

やをさく物も育り秋をさる 太太 祇

手短かに秋をさる人おす秋をさる 蕪村

秋をさると楊子と姑さる泊る家 太太 祇

秋をさる烟目まつく舟より 孤桐

秋をさる道毛吹くくるれ上 習先

秋をさるふくわさるしふれり色 迂童

秋夜

秋の夜と徒者れ 軒うね 駒門

俳諧雜選

七九

秋のやや回め丁をさき

五子城端

亞三

水鏡を起さよりの

嘯山

秋の何の邊をくもる車

鳥栖

娘の気水鏡をゆるる声

孤桐

松上秋の如とちか刀の神

蕪村

満る藤を又さくおる水鏡

兵庫

衝冠

水鏡をゆるるるを

太祇

走の如く余るる花の戦より

沙月

鹿

山姥のあやまらるる鹿の声

恭里

鹿の中の一樹の陰の木換小石

石

蘭亭

空る鹿小ゆめを鹿りの声

卯雲

小宮の鹿や鳴く小方れゆるる

イセ

御風

若たしめ若る花や鹿の

沙月

多き鹿の聲を鹿の鹿

鹿

嘯山

芭蕉の鹿の鹿の鹿

小松

羅嵐

ゆんち系といへる麻の多

潭北

雨の麻くさくさく鳴り

嵩平

新葉の葉とさくさく声

沙月

信長くし守下や麻のしと

篤羽

豚まのめさくさく声

習先

近き村男麻の角も泣けり

左釣

鳴る麻のふれりや一祈備せり合する麻の命なる

龍眠

雲の如くふれり麻の声

蕪村

くさく一里さきり麻の多

雲魚

秋暮

くさくささきり麻の多

祖扇不堂

酒はさききり麻の多

歌長尾二

秋のこれ反橋紙くさきり

嘯山

ま繞て海の松さきり

太祇

秋

さきさき日とくさきり麻の多

周砥





いふとくしんしんききさかのみ 大夢

まへのけがれをたれよきしり 一鬼

たの風情余るおとせりまれ 麻兄

うらむとほしくたれ我もり 水翁

たれふく風しくおとあつそ 雅因

雞頭 葉雞頭

雞頭や片山里乃門 嘯山

三伏れ骨以赤 雞頭 肥後 語

いれはあつそりあつ新以 井濤

たれとほくも新以のけがれ 赤羽

とれもほくもあつを新以 嘯山

新のたつとほくも新以 武然

葉雞頭いれもあつを 富水

引板

あつとあつ引板はすし 赤羽

引板はあつとあつ引板はすし 之房

和言新選

稻 新米 田苅

暈 石 田苅 男 習先

飛良 三ノ

嘯山

太祇

雅因

鳥 瓜

蓼太

瓜 六屋形 舟

梅 嫌

五好

存義

柑 類

桃葉 森

孤桐

嘯山

和言新選

三三

俳諧新選

楳杵や二河野やう西の袖 文誰

九の母の秋とまのりまきこうね 孤桐

露時雨

露時雨ぬまやとせり自不淋り 季遊

中身しとれん宿と静けは静け 嘯山

まや声しと静け 雅因

重陽

杖とつくと女と静けこよる粟 宋屋

雨くまそと女と静けこよる粟 嘯山

まきとつとれんき菊のちろろろ 雅因

つとつとつと静け酒とるろろろ 召波

酒わつとつとつと静け酒とるろろろ 嘯山

栗田家楽  
推國栗

穂とあつとつとつと静け酒とるろろろ 儿菰

まのりまきこうね 雲魚

まのりまきこうね 沙龍

俳諧新選

巻

園のあやもるる勢とふるまん 瓜流

園のあやもるる勢とふるまん 嘯山

推しゆりくの嵐の移りわりあらわい 孤桐

海とんとよいかきー板のぬ 歸厚

菊

白きやな余りく白田ま 蕪村

雨ふ斗おたま市や 菊くけ 五鏡

雨ふ斗おたま市や 菊くけ 卯雲

杖つく葉もまうや大内山 茶雷

盤まおとやかくの菊也中 而章

垣のまま葉徒ー落月如 其輪

病のちれ白し死ののちれ 千梅

拍のぬくとらぬ庭の葉とみ 春來

曉のちのれのるる葉菊とれ 不角

あらまの葉はちのちのるる葉菊とれ 存義

ふりふりふりふり葉れ茶る 移竹

古今林苑

葉の鳥や庭のまれ山

嘯山

竹のまじりて葉のまじり

篤羽

葉のまじりて葉のまじり

素園

山嵐の苔やうき葉乃露

宋屋

酒瓶と洗うて葉のまじり

龍眠

月夜の中ふ白くも菊乃露

土髪

あ七日九月日わやまきの花

五木

播れりてふはらふん葉能也

布門

漢水には白菊白くも

太祇

雪刀を葉に洗うては右引

雪蕉

物堅く庭のまじりや菊れをれ

隣水

葉のまじりて葉のまじり

樗良

乃る葉のまじりて葉のまじり

石爛

冬に向く葉と菊れ性所る

赤羽

らんまがまじりて葉のまじり

眠柳

葉のまじりて葉のまじり

可幸

草 菌

松茸やかたらとかなまね始り中 駒門

茸もぬぎ君うまやう茨捲 鷺喬

蛭まのふとつしや菌う中 兵庫 雷車

ふか田よあくまややけ 菌 它谷

穢ふふ捏くなくひるあのみ 尺布

まつふも桂ううぬけなる子式 麥翅

茸持のりやハ遠近ふぬか 雲魚

牛 祭

里のみとそく取海うら神 太 祇

角ふまれい月りうー牛祭 蕪 村

牛祭終るー女中やる人 嘯 山

後 月

与月のおも洲多り十二夜 龍 眠

うらうくくる根いなるやほの月 貝 錦

よふ月も移りまゐるや十三夜 儿 圭

おまゝと御守とえりや後の月 嘯山

後々の面や月れ獲男 几董

我者もゆりまらん十之秋 春來

此所の回毎とんりや十之秋 惟善

かゝり秋葉とふ如くや後の月 帶雨

十之秋と出づるも十之夜 同 百菴

ふの結ふとくはく身は後の月 三枝

楓 野山錦

二三度ある日掃やみ葉物 水蛙

ふんばれは葉れ海 菜根

つらやと勝負の楓思ふも 枝芳

下席の葉もとまぬりやみ 宗専

ゆきれきてやみとみとみ 五鳳

花葉のふもはうらぬおまふる 鶴英

古くより人きりりらうや 石爛

けほの雲とれかみらや山つき 嘯山

送送る山は雨や秋をる 吾友

川<sup>高雄</sup>のほとけくさるるから式 移竹

雑秋

く甲と訓く葉の静く 鶴英

焼米やこまゆり乃は粉の林 召波

泉岳寺化人うまに墓系 瓢水

根の泣と冷人しあるめ甲 之房

十をう甲一形さるるをふ 半魯

うらうら未花のあるあくるる 蓼太

笑やささくもあふ木槿うね 龍眠

ふゆく目らるるあまんあは流 凡流

昔今あ濃わや蔓珠沙華 祇川

路へん言額を許者た五加木 竿秋

とくやも草れ杉湯の桐羊<sup>大坂</sup> 嗅洞

あやうのねあやうのりから 嘯山

くく<sup>八朔</sup>あやうのりから 布門

雑秋



沙多釣や鼻か多行く百んむ 太<sup>小</sup>祇

ら海りく遊くあれの由 蝶<sup>小</sup>我

ゆきまきまもあけききん草はる 召波

秋の縁画壁の工久自ふり 自笑

新らまはる都く教生舎 十<sup>小</sup>草

好まふかし家くあがり 白芽

挿ら賣らんあしをもあしる 止角

ふく風のきくありの芋梗式 孤桐

月の影やあつち好む物糸一 太<sup>小</sup>祇

杜風のうらねふ一富士のふ 李丈

あま透くあ骨あるる柳くれ 它谷

築とりの海をわく噂やと年沼 太<sup>小</sup>祇

寺子金はなも後常も鴨肺式 嘯山

喜枯よふれゆら小雲系 全

菩提樹のまふ方乃杜杜念珠式 壽<sup>小</sup>松

蛤や世月おれたく海なし 瓢水

俳諧新選

ふおろしとちる若菜縁わらわきり 赤羽

さやまのけけく旅中千部よあるうたれぬれが 冠那

けしや家うらや若菜の志 八川

秋ちる家よ雨のまよ江戸夏 亀成

こみくを白の目きるや秋の雨 梨越前一

あふたそよまに泊や秋の雨 太祇

山里や毛根より上よイセ麻兄

文遷 樹よ藤わをや秋の雨 河

る坂と菓をたたり山にらし 太祇

しとちと秋のふもよまに秋の雨 李雪

と月や寮の灯をそよまに 文湖

かまよ今と秋を暮るよ志望の里 二柳

あふやまにと秋のうたれ 雅因

あふと秋のうたれや秋のうたれ 希因

暮秋

一回くさあましく秋の信はさす 桂舟中

一回くさあましく秋の信はさす 桂舟中

ひねやもよそなく 風ハ恋ふく 素園

路さる 風をかく糸移り 巾糸

ききり さらけ弱やわくれのね 太祇

几らやまれのゆき小秋くれぬ 枝芳

われゆる償もなく秋了け 斗吟

ひねや淋きも赤羽のまの 赤羽

ちりくくしねと情のぬ二三人 嘯山

新選卷之三終

嵐の侵す 疆や九月

俳諧新選卷之四

冬部

時雨

行隅 二日の月や神スルカ 吞鳥

かたけりす 松花のまき 神スルカ 鍾山

初時 ぬく風月れ 吉野も 嵐山

雪れ思りり さらや 太祇

女房と酒のおも 巻古

鞭ふ川やみとるれの牛車 蘭所

絶京れ骨あつるもとるれ 富水

や行ふ川の流るねとるれ 八好

月時ぬかふるく流るぬまより 習先

流る売の干るねる水やし時ぬ 寒鳥

時ぬるやねとるかすの家へ 駒門

流るの風ぬるく流るれ 白芽

一一く流るぬ流るるを 南露

甲斐かへや富士たつ所の時ぬ 合浦

流るへちを拘むやちりれ 嘯山

移子のち流るるやぬ時ぬれ ちら

大の声あちりの村をきよ 季遊

ちらるやつ田れ流るつらり付 羅雲

ゆきりたのゆらりとかなすはぬ外 竿秋

障子まゝ流るるく時ぬる 楮林

ちらるやゆよする時ぬる 貞至

初はつれれ風かぜと活いきけきよよ海うみ石いしころ  
ててるるららねねらら子こ婿むこのの灯あかりのの光あかり 南なん雅や  
干かん也やよよ母ははハハ少すくくくちち三さんくくれれか 可か興きよう  
寝ねくく冷ひやハハ遊あそ人びとをを村むらししれ 儿こ圭けい

落葉

落おち葉はををつつぬぬはは高たかくくももらられれ船ふね 習しゆ先せん  
花はなととままととちちつつらられれややぬぬ落おち葉は 子こ一いち  
川かわのの石いしははおおととくく流ながれれおおららししれ 五ご始し

清きよららしし落おち葉はのの多おほきき月つき乃の下した 自みづか友しみ  
月つき乃の下したのの影かげ減くるる落おち葉は式しき 素す園えん  
名な庭にわ子こ凡ふつ乃のかかくくくく落おち葉はををみるみる 淨いそ石がわいし  
上かみ落おち葉はをを徒たゆゆくく齋いひらふふ 貝かい錦きん  
岨いづみのの山やまををかかくくくくのの落おち葉は式しき 太たい祇し  
落おち葉はをを不ふ落おち葉はををかかくくくくのの男おとこのの音ね 嘯せう山さん  
九く折せつ流りゅうのの形かたちりりおおららししくく沖おき 瓜うり流りゅう  
なならられれのの落おち葉はのの多おほききやや流ながれれ流りゅう 霞あさぎ洲しゅう

山の肌あつらぬる落葉の如若山粗岡

雨乃力の僅くと均す落葉なる由至

けしきとまじく満く西落葉可鉛

山乃や落葉掃くもや水の中多原哥口

又まはまる先とふねむらむ式蓼太

落葉一々幾日小如ぬ落葉存義

耳をくくるはまらうく落葉蘭丈

目のまぐ月のまらうく落葉李流

しるまに落葉のまら切通し大夢

吹くまに形よりうく落葉蕉羽

枯野 冬枯

なんのほろもろきり事枯葉孤山

枯果くをきりぬる物葉李院

晴風のまらうあさ枯葉鼓舌

まらうまらうまらひひ枯葉沙月

是なりて正月よりうれ物英鶴

一箇の川川のくすす枯野ふ 潭蛟

昔はなれはるる枯野ふ 可鉛

白鳥もなるとも枯野ふ 蕪村

是のくすすや枯野の鶴は乳 且水岩沼

鳴りてはるるや枯野ふ 嘯山

妖きねとふふと枯野ふ 吞鳥

とふふとふふと枯野ふ 雲魚

十海あり古くは枯野ふ 白羽

よふのくすすと情じはるる 春來

結界乃内とふふと枯野ふ 移竹

淋くすやとくすや枯野ふ 百萬

渺くと月夜りる枯野ふ 雷車舞

ひらけくと方と枯野ふ 太祇

空くふり糸かき枯野ふ 司鱸ノト七尾

野のふりやと枯野ふ 紫水

枯野のふりやと枯野ふ 鷺喬

ほろくくもを枯も枯も枯も 駒門

雪れかきき白やうれ柳 李流

海う紫よやうき風やれ柳 麥翅

柳枯くもほくとをれ流うか 習先

枯柳、みしな風のにらり中 高者 浦玉

み枯くももろろる柳うれ 水翁

枯ふしり静もれ柳うれ いせ 大篁

枯尾をえと柳うれらり 文素

み枯もをく如り加藤く 鴨 水翁

枯声の目くくおく海れきり 関更

冬木立

楓啼く肉裏のぬやを木立 沙月

み木立すうとれ菴のぼりぬ 蜘蛛柳

みれ枯る鳥れ柳やを木立 孤桐

守しぬれぬの雲やを木立 習先

み木立すあくくもれぬり 青蒲



尺の袖よりみまをあらわすしあはれを 丈石

あはれをあらわすの月やみまをあらわす 嘯山

あはれをあらわすの生しあはれをあらわす 支鳩

あはれをあらわすのあはれをあらわすの縁成 丈石

寒菊

星の海よりみまをあらわすしあはれを 唄子

あはれをあらわすのあはれをあらわすの代 斗吟

あはれをあらわすのあはれをあらわすの風か 淡々

あはれをあらわすのあはれをあらわすのえり 嘯山

あはれをあらわすのあはれをあらわすのけ 李流

あはれをあらわすのあはれをあらわすのきり 赤羽

達磨忌

あはれをあらわすのあはれをあらわすのせん 春來

あはれをあらわすのあはれをあらわすの守 嵐山

茶花

あはれをあらわすのあはれをあらわすのれ 半魯

茶のふもや茶も白も白も茶も白も 蕪村

茶の紅も川も青も又他一 嘯山

茶の白も茶の白も茶の白も 壽松

枇杷花

ひやうすもまもももももももももも 東残

枇杷の白ももももももももももも 巳白

枇杷の白ももももももももももも 古津

口切

口切も春もかたもかたも 和流

口切も羽も羽も羽も羽も 嘯山

口切も春も一も一も一も一も 春來

口切も春も一も一も一も一も 太祇

巨燧 女子 團扇裏 火桶

燧一や火燧の上此小盃 召波

燧一や火燧の上此小盃 希因

燧一や火燧の上此小盃 榊

長くとも居るに探るこころの如  
たゞ一かたしをききしよこころの如

嘯山

彼其の声をきくやあつたむけに

孤桐

るの事入る易にたふしの如

習先

はくしのまを圍るこころの如

斗吟

まの庭をゆく譲りこころの如

季遊

吾れも我屋敷をまゐる如大坂

笛十

日の影とほしくまはるこころの如

梅史

久しきもこころの如あつたむけのまゐる如

沙月

神の毛乃ほるるまはるこころの如

雅因

化移る影れあつるこころの如

音蒲

我者れこころの如

凡流

草の戸やこころの如

太祇

あつたむけをきくまはるこころの如

鼓舌

仰て下をきくまはるこころの如

休粹

あつたむけをきくまはるこころの如

凡流

舞の影をきくまはるこころの如

貝錦

櫓の出しもゆるに花もさびた  
龍眼

付ぬるふ房の寒中いろをる  
哥口

まねりて水も櫓も流るる  
李流

傍のやもせもくも森る侍  
挑葉

智經じんをて所のさ備れ  
石爛

押さくく又川流るさ備る  
武然

返花

毛のしるもさくもさくも  
赤羽

しらくもさくもさくもさくも  
杜支

秋月のぬ余りもさかたさか  
芝シロ谷龍

うしほのさくもさくもさくも  
嘯山

風

風や、つれ、月れあり新  
射道射道

風とねも、つれ、さくもさくも  
孤桐

風や、つれ、のほろ、さくも  
雨谷

風や、つれ、ある、つれ、秋のも  
鼓舌

風や雲をよみけりて里を

許適

風や吹らばさかた家なる

石爛

風は秋色をよみ吹より

杜支

風や吹らばさかた家なる

麻兄

風や何れをよみ吹より

蕪村

風や吹らばさかた家なる

柳水

風は吹らばさかた家なる

太祇

風は吹らばさかた家なる

止角

風の枝葉をよみ吹より

雁嘴

風や吹らばさかた家なる

乙総

風や吹らばさかた家なる

鍼眉

初雪

初雪や吹の布ぬきぬき

氷々

初雪や吹の布ぬきぬき

季遊

初雪や吹の布ぬきぬき

文江

初雪や吹の布ぬきぬき

鼓舌

御言新撰

初雪のまのま 相もまろろ

嘯雨

初雪とまろろろろろ

亀卜

ろろろれれれれれれ

吟角今山

ろろろろろろろろろ

舍人同中齋

初雪れれれれれれ

赤羽

初雪れれれれれれ

宗專

初雪れれれれれれ

蕪村

初雪れれれれれれ

自東

初雪れれれれれれ

雲魚

初雪れれれれれれ

宋屋

初雪れれれれれれ

雅因

初雪れれれれれれ

武然

初雪れれれれれれ

嘯山

初雪れれれれれれ

太祇

霜

初雪れれれれれれ

周砥

舟のりよらぬくまおあわび  
 糸遊  
 白羽くわくおちるあまのこ  
 赤羽  
 昨日まことよらぬくまおあわび  
 茶雷  
 おあわびくまおあわびのむね  
 亀石  
 白羽の海るあまのこ  
 庭臺  
 おあわびくまおあわび  
 洁々  
 おあわびくまおあわび  
 孤桐  
 此言のあまのこ  
 李流

清き心を遊むはくまおあわび  
 音蒲  
 うら風や埃よぬくまおあわび  
 龍眠  
 おくまおあわびのむね  
 稻音  
 復乃た清くまおあわび  
 嘯山  
 我々の新しむくまおあわび  
 祇峯  
 十夜  
 あわびくまおあわび  
 諸號  
 ハまおあわびと新する十夜  
 鼓舌

非情新選

三

備前新選

袖と栴も此法よれぬ十夜式 漁焉

以小僧の息あつてぬ十夜式 兔流

月影よみれもあつて十夜式 百萬

あつて川の子ふりてあつて十夜式 太祇

祇王祇女併にあつて十夜式 嘯山

御影講

宵たもあつてあつてあつて十夜式 習先

あつてあつてあつてあつて十夜式 太祇

新りてあつてあつてあつて十夜式 嘯山

夜著 蒲團

田圃のあつてあつてあつて十夜式 文湖

あつてあつてあつてあつて十夜式 鶴英

あつてあつてあつてあつて十夜式 召波

あつてあつてあつてあつて十夜式 太祇

あつてあつてあつてあつて十夜式 嘯山

あつてあつてあつてあつて十夜式 羽律

非昔新選

馬



大舌の飯床憐しやん外 蕪村  
活伝れやんとうじ磨凡式 太祇  
里下のささるるあふん外 赤羽  
娘と背たあまつるあん外 多少  
わさほまほくあじやん外 李流  
めくやささるあふん外 孤桐

生海簾

海にあらゆらるるあふん外 谷水

出くさけの自陸落り如海簾外 尺布  
穿あけはあまらるるあふん外 富水  
あま合くあまらるるあふん外 大夢  
あま合くあまらるるあふん外 可幸  
あま合くあまらるるあふん外 來雨

鰻

鰻けはあまらるるあふん外 漁馬  
鰻のあまらるるあふん外 銀獅

上巻 一五五

人ころみまを鮎とほひりん  
鮎谷一人の存を乃とるる  
 鮎けや少家よ似る竹のえ  
 鮎やこ小舟の舟ふ又破ん  
 ちるせし鮎を信とみくけ  
 物けや椀く形く色く色  
 鮎所る女をよ物ぬのふし  
 ちるころ鮎谷よとの妹形ふ  
 鮎けくくくく人よかたり  
 太祇  
 支鳩  
 雪蕉  
 蕪村  
 赤羽  
 之房  
 孤相  
 百菴

冬籠

余成たりや鮎谷実れあふ流  
 石女と流よふかれあふ流  
 杵味やも物性の白くもあふ  
 火傷くゆいぬやあふこ  
尻にその葉の様やみしりり  
糸のちきりくぬしきり  
 書くやふゆはまけりあふ流  
 妻のらり流くくあふ流  
 此流  
 樓川  
 貝錦  
 超波  
 太祇  
 龍眠  
 鼓舌

少や角の欄を道やみさるや

富葉

けしけ快た辰やみさるや

嘯山

ちせぬものかまらやみさるや

篤羽

澄戒の山部しゆやみさるや

它谷

みさるや店の湖をみさるや

多少

みさるや数子つらやみさるや

寛留

衡

ちせぬや内裡の軒をみさるや

嘯山

ちせぬやみさるやみさるや

孤桐

浪中を園とみさるやみさるや

龍眠

いさるやみさるやみさるや

李夫

下の雲をみさるやみさるや

召波

あまの月をみさるやみさるや

交翅

山川の果をみさるやみさるや

它谷

みさるやみさるやみさるや

紙隔

喜ぶのまけをみさるやみさるや

三笑

面別

熊内

水鳥

水鳥也 燈灯を以西北京 蕪村

水鳥也 葉を以て行なり 白新 李有

代るく 柿を以て水鳥也 李流

龍安寺 龍安寺 月を以て家寺此門 嘯山

静かな 水鳥眠る 之房

水鳥は月を以て 習先

水鳥の 中下 小早 夕日 如 圭山

水鳥は 交翅

水鳥は 龍眠

水鳥は 赤羽

冬牡丹

水鳥は 萬翁

水鳥は ト我

水鳥は 習先

大根引

大根引

古根のいづれもけり神立月 珪琳

心善小流をりや古根引 嘯山

古根のえを鳴るる実入の那 它谷

物言ハも悲しきり古根引 瓜流

糸よけ日南ハきりし古根引 孤舟

鷹

鷹を奪やんとせん松の上 寛留

飛鳥は糸つまらそ鷹を奪 它谷

ゆくり中とつ以り奪れ月風ら 篤羽

車牙も笑の掬れ奪れ月風 竹牙

かゆ奪し大に眼めきさしきり 文湖

冬月 寒月

大元小おひしり奪れ月 喜水

月とれを奪の満月竹よふし カガ松 和笠

河をりしをさしきり奪の月 大坂 龍池

せらりしを奪れ奪れ月 篤羽

をうらぬちとてや月の色 存義

を枯らぬ終に月も枯るる 自笑

初夜のわらぬまにその月 肥前平戸 楚玉

やふらふらに雲をよれ月 七ツ熊内 文水

寒月やけ雲守れひららぬ 之祐

言ふれの珠さくし月も一 雅因

き月やあまの掬ふけし奥の院 きくとくき月さくしこり 太祇

き月や一眠く人ぬくはるる丸 沙月

寒月や寝くらしく冥ヶ原 嘯山

き月や信よりの合ふ楊枝上 蕪村

紙衣

きくぶんそ今年もきまる紙衣 貝錦

らもよ此かしく以合ふ紙衣 篤羽

山風の吹割もる紙衣 嘯雨

今ハキ人ももえぬ紙衣 烏栖

紙衣をそしるく神をさるる 三ノ女 常世

白言 春 龍眠

心く十若くく悟ふ 孤子る 龍眠

我若くくもまぬ 涙白子 多少

似合ふとせき ぬまはる 孤子式 大夢

春若くく心まに 白子うか 卯雲

春中と 納子 孤織や 妖乃皮 存義

水仙 水仙

清くも 水仙 春くも 春くも 一兔

水仙の 春糸 孤若く 孤若く 秀乃山

水仙や 春く 様よ 抱おろ 暮四

春の 春よ かなれる 春うら 文山

生けら 春や 小咲 春水仙 守大

春の 春と 切も 此 春 土髪

春の 春く 春戸の 水仙 春 之房

水仙 春 春く 春く 春 以樂

寒 隣 春 天文 春 貝錦

水仙 春 春 春 春 春

桂床く日のかほのささか 雁觜

初まらしく月なるさきうゆ 子曳

空はあめ風ののりきうふ 太祇

羽の尾さへてく月ぬれささか 天露

けり夜や代るや白土はもてつ 孤桐

さし和や肉まはるる承のきり 嘯山

けりや青くけりけりけり家 金刀

野はつのおかしむ程のささか 雁宕

絲抱くあまゆまよささか 練石

とら風をさくす戸のゆるささか 篤羽

さし見やまはれ中乃絲以 它谷

かゝる痛るささかささか 既白

酒のたるとささかささか 麥翅

本併のささか元ささかささか 白鴉

ねまをほれくささか河辺水 蓬洲

けりくささかささかささか 之房



霰

昔もやわしりの浮め山 百萬  
 替耶晴く帆棚と折く妻小 雅因  
 新もあらし冷き雪 嘯山  
 ひもれ綿もやうる妻小 孤桐  
 雪の橋追てりる妻小 可幸  
 きりけし物小もる妻小 之房

雪 吹 霰

雪の白や心黒ハを以て浮め山 若山 吳郷  
 大雪もあらし折れもる妻小 蕪村  
 雪もあらし折れもる妻小 鶴  
 折れもる妻小中もあらし折れもる妻小 貝錦  
 雪もあらし折れもる妻小 百里  
雪もあらし折れもる妻小 赤羽  
 雪もあらし折れもる妻小 反古  
 雪もあらし折れもる妻小 凡阿

雪の白や心黒ハを以て浮め山

若山

もくはらけみきや、大坂方祭

一はゆく物さくし、若の面孤桐

たちや風色そら、あつたふら嘯山

杖倚りてさあ、るる鳥暁

寝所へ傘の折や、らる可幸

一峰と二原を、一傘乃若嵐山

袖のりい、小畑さつは風律

ほろろい、おれら巴東

帝くす、おれおも蓼太

大佛の優れ、ゆ白百萬

おわりや、あはれ羽律

とらぬ、又たつ孤洲

侍々、ゆき土髪

水尻のた、はわ左釣

る、あはれ亀卜

白鶴の声も、ふ麻齋

乃る身小ほきしや 古れ 梅 蘭更

古れふ傘のき 文 子一

縁し や 古れ 門のき 吞獅

古の目や 四角 と け 諸九

古ふ な 古れ て 孤舟

古ふ ら 古れ る 支鳩

古ふ ら 古れ る 雅因

古ふ ら 古れ る 蘿菱

古ふ ら 古れ る 二柳

古ふ ら 古れ る 吟阿

古ふ ら 古れ る 冬扇

古ふ ら 古れ る 比松

古ふ ら 古れ る 太祇

古ふ ら 古れ る 社中

古ふ ら 古れ る 沙月

古ふ ら 古れ る 武然

連々あめあふりしるる 万翁

あふりしるる 野冬

里くふりしるる 召波

禱ゆりしるる 井々

あふりしるる 悟人

旅店のをれ 八衢

あふりしるる 瓢二

白雲 文山

はくく 旧國

氷

花瓶のあふり 練石

今後 大夢

あふり 霞洲

あふり 嘯山

あふり 蕪村

あふり 雁嘴

赤川の赤き水よりお来し	行りし北川の舟ける水	多車水の町や舟りせん	鯨	少くはの入果る鯨之舟	浦ふる舟より舟鯨之舟	はあふちりし舟りらる	鯨之舟も油之
赤羽	血流	千仞		赤羽	周蛇	篤羽	之房

赤川の赤き水よりお来し	行りし北川の舟ける水	多車水の町や舟りせん	鯨	少くはの入果る鯨之舟	浦ふる舟より舟鯨之舟	はあふちりし舟りらる	鯨之舟も油之
赤羽	血流	千仞		赤羽	周蛇	篤羽	之房

遠る所おのれ恨んくし所ふる 支樵

頭巾 足帑 綿帽子

州舎わすくさくさ人様 在江巾 瓢水

冬を長く圓守福の江巾のれ 几董

夜の寝中よこり江巾の子 古津

寝る所たふれは体しとひより 富水

云帰くと寝てと感けく衣襟の内 百萬

たぐとせく晴れぬもや流わしし 太祇

里よりや野所江巾流わしし 召波

冬至

川畑極とつてふやおらうね 周禾

新算の江房りはるをむかひ 孤桐

舟中よきそ嵐の晴しやふらハ 嘯山

寒梅 冬椿

冬梅下脚 多れ茶多り 尺布

冬梅や蒼く初る日此寒令 赤羽

さしぬやうな早のきりおの末 玉指

早梅やゆきのりふき 平戸 嶺免

あまのりゆもさしき 五桝

さしぬきをさしきささき 太祇

さしぬきをさしきささき 赤羽

鉢叩

海甲といじりのきを鉢叩 泰里

余と加はる小舟舟もあや鉢叩 安里

鉢叩おれぬのやういふ 江戸 仙鶴

さしぬきをさしきささき 嘯山

さしぬきをさしきささき 蓼太

寒念佛 寒垢離

ゆきのぬき声やさき念佛 蕪村

ゆきのぬき声やさき念佛 と 輜史

さしぬきのりぬきをささき念佛 紫水

さしぬきをさしきささき念佛 楮林

藥食

赤い冷きもの	家じ尻の馬より	尺布
車に乗るもの	牛と冷たいもの	蘭丈
鮎けをとるもの	火場や茶屋	水翁
酒やうきもの	へんごり茶	嘯山

煤掃

石山のふもと	磨るをすし	研	必化
煙と掃き	我家をみよ	より	伊流

西宮

すし掃	嵐のふく	馳	那	移竹		
すし掃	やきもの	時	たき	嘯雨		
門	はし	麻	よ	ま	百万	
掃	ぬの	戸	の	掃	太	
な	ま	は	ゆ	き	や	ち
ら	す	し	掃	子	一	
炭	炭	竈				
う	け	ら	く	足	り	
も	酒	の	白	い	之	
孝						



山嵐のわらわらやうらやん

嘯山

炭のやまや通帯染は名切声

凡流

岩窟の煙のまらぬお水か

水翁

岩窟の煙のまらぬお水か

肥森

挑葉

岩窟の煙のまらぬお水か

玉里

餅搗

餅搗や月の光に映る

柗居

餅搗や餅搗初と初とく

貝錦

解衣のまじりてのふり

平戸

一杏

解衣の相とまじりてのふり

平戸

吾雪

解衣の相とまじりてのふり

赤羽

解衣の相とまじりてのふり

五筑

節分

節分の餅と餅と餅と餅と

末屋

節分の餅と餅と餅と餅と

宗雨

節分の餅と餅と餅と餅と

珪琳

おろもろのびおろ一妹う下 太 祇

角力家の裸を常や尻落一 孤 柁

追従乃し上六たう一尺拂 羅 人

佛名

仏名也心く心記方此罪ハ何 鷺 喬

佛名會後たけけるおり多 之 房

雑冬

我意お好小如ちる納豆汁 雪 峯

草此戸小く記流也納豆汁 百 萬

はふふろ下小く市所ハ多味も 長 木

そまのれ味くまのり此流く如 南雲 外

よ小くろく名つるく一教の如系 文 江

まの所也位おハ日お長く一知る 大村夏 友

わろるをと持るふく一酒代也 巾 糸

折也いし中居眠るわろる 平戸文 狸

寺此のり少祠也神き月 嘯 山

立身其の如く鳴る鳥を凡そ神鳥乎  
 神鳥月鶴よ瘵れかき多り  
 侍の如くとくさしや蛭子海  
 山子よはら黒耳や鶴子講  
 一葉の如くはら氣のつりれ  
 石をけやこま家のつりこき  
 人れよ命は湯の如くや如成物  
 子なきよまよ一まはる家の風  
 燕石  
 雁宕  
 流  
 山  
 英  
 錦  
 流  
 羽

師の衣よ葱糸くまん如く如  
 弓矢や指しおろふは壁人  
 知る如く如く如く如く如く如  
 物如く如く如く如く如く如く  
 如く如く如く如く如く如く如  
 如く如く如く如く如く如く如  
 上り如く如く如く如く如く如  
 色かんと葱くくや衣  
 嘯山  
 全  
 青蒲  
 其來  
 孤洲  
 太祇  
 左釣  
 五鳳

自書所見

三三三

嘯山

法衣襟や蓋合ぬ程記り物 藍眠

之と云ふれをい余りや保云ふも 大村 水

之と声のそくうれ新嵐う那 変翅

猿八よ心なしくゆせ人よりね 大村 不有

鯉を考れ始りてんこく上をえん 一扇

早まりまぬ何う候やうそりろ 大村 水翁

のこびりとも鳴よけるこそ苦き鳥 大村 千澄

竹果ぬすこゝかきり冬の籠 文水

歳暮

しりや 大村 田代と雲うこ白 卯雲

物本のそや又おのや 大村 梅史

海秋乃えおりえん 大村 秋水

みん 大村 百ふきあわ 大村 李流

ふん 大村 く 大村 語れ加田の 大村 世二

ふ 大村 り 大村 守 大村 り 大村 と 大村 ぞ 大村 くと 大村 ふ 大村 の 大村 飲 大村 良能

たぐりし水海と繋る雲とひる大坂法策

ひしや連る所物々何々何 素園

浪浪の力く浪浪じ山を式 郷今

追廻く吐きさるひ作をれ長 枳義

利こそ若流のりや此若也 太祇

地の新まかさん新の松 富天

干鍾と振指らんやの音 樓川

月とらね曆は末と如くさり 赤羽

ひくれぬ又我癖の癖なき 秋水

年本自遣も世守肥る標うる 文貫

書おしや字とる海く竹の音 行雲

ひしきもくしきるに曆うか 吞江

ひしきあの上は布系るりや 嘯山

ひしきうれきまのあしや大平日 瓜流

ひしきや招く我物より大坂 李雨

ひしきや遊りよる源を式 土髪

米春の既之やしや見え 江戸 米仲

梅柳餅ありまき今もあらし 存義

去りゆくをれちまや道の香 半魯

うらむとぞつたり古 曆 五銃

合し古に古に舊や金津碗 泰里

目れえぬらんややしの香 鶴英

我らとれりよれかきふ 風状

橋妻のくしすまのやの屋 宋屋

けし入る穴をさり武蔵野 野右

あけけや焼く酒の掃れお 吞江

をらみのやきりて見ゆけ 丈石

灰のふえ服を古の年のくれ 平戸 臭翁

棠のよけ御ともわ源走られ 大坂 田鶴樹

押し守力もさるをよれ 三ノ黒 頤仙

高きよやふ切りくは泥よ 移竹

草芽の枯葉よ年乃埃ふ 其流

ふねとそ袖の白ひや大と十日 菜根

夕冬と集りくよしひれき 珪琳

雲の半日とそきくさんとのくれ 楚瀾

ふこくし兵服屋河のゆを式 羅人

ちろくしやいや初れやうのきき 雅因

寺内立春  
のけしよ  
のけしよ  
のけしよ 嘯山

新選卷之四終

俳諧新選卷之五

雜部

古體

かろくし祝あをそひき草れ候 丈石

命隔とさる ちろくし川や流れ少ゆし 風狀

新柳ききとそわろくたそりて 波光

旧年運くたそりて帽子式 太祇

稲妻や二子とそりて 劍 澤 蕪村

未萌の春成し月ねる由式 龍眠

夕月の暮るも風の夜ふね 才之

搗きた餅つゝか指り式 土髪

物成りや春おのの澄茶 雅因

往くと汗んけるよや柿う下 嘯山

すましは流河のみれ宿祿が 全

檀林體

授うや秋の雲は死し似り し澄

る床よりなる茶とるうは居種破ん 存義

已歸市り五夕の本たわも 龍眠

右れ河豚鮓鰯のよまうん寺 蕪村

おちとらちとらとらけい碓ふ 全

隠者或日はとと出と給式 大夢

猫の妻のれ生うと取年 太祇

名と研や遠業は精人間と 全

いんちうらと火燈あるふら 赤羽



曉湖水と汲くさらさらを切け 嘯山

球栗れ笑テ曰吾老矣 全

表真の狸抄よりいれぬ笑たり 無名氏

曲水の宴下床つて人々を嬉し 雅因

園若は所を福の定う観々里 蕪村

愛れぬ幼弱のそと去らぬぬ 卯雲

古園へりいさむるをけりハク 嘯山

栗のわりの目と合ぬ 全

以下雑體

海風乃とわらや麻の聲 宋阿

下野や奥を石も似花の氣 全

古を家よりいまつらん 宋屋

松風の神とやあそぶのそと 全

九龍苗別 此風くは巾の先と立ち 全

麻の葉をてをくし海する追風水 勝波

雪渡公と送る 白やまの節のそと小の結成 百萬



下詠の菫よしの令やくるはる 木屐のうろ店安と笑して 吐 馬路 月

月やらの清らうらにそはるる 大津よ若く 吐 友

おまを系唄とちばふ泊り 片思 半 魯

形ふのこゝろをさるや片朝 取立 全

柳のそとけしとそはれ袖 継子 珍 志

おの息や清きよの鳥さす 竹林はく奪と小晴 雁 嘴

形のみまは 真田侯野因 喜 圓

下 真田侯野因 喜 圓

く 和歌麿 鯉 洲 若山

後 橋上月 吳 郷

萩 本考の弁そ枝の葉のてまか 大 夢

薰 寄深意 二 夕 坊

屋 糸居 射 道 山本

合 一風不佳 玉 壺

札 雀英妻 雨 谷

梨 春怨 血 流

山 宿

伊言新選

念寒園怨あましく又望んて二人長心

嘯山

雪幼女初月忌くじりしはあなるほれしを

玉芝

うらあすまふくろをせらるる中代

牛行

泊仙基茅風菴用堂もつし連る風百人ひのぼる

雁宕

不男の麻楓の下小かちちや画る聲は代りく添森る

竿秋

ふ楮林子席上雪は芦鷺賛ふふふふふふふふふふふ

全

度吉野く致しき白山加ね花子な

菜根

又雀繪賛ふふふふふふふふふふふ

淡々

あま吉野くやふふふふふふふふふ

全

杜画賛るかし飯は酒は新きり

嘯山

似我今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子くくくくくくくくくくく

全

あ世夷寺の茶小僧さしそと長途の芳とさるふふふふふふふふふふふ

希因

抄父の母抱えりかかるともあふらんふふふふふふふふふふふ

全

猫速懐もふふふふふふふふふふふ

知二

神奉納の栴鼻そつらつらふふふふふ

且水

あ仙基王醉ふふふふふふふふふふふ

鳥曉

月昔新選

ととやーき 可幸

人信作云 卯雲

首のまゝも直云れハ棟工訂 全

瓢工駒次 赤羽

古所頭白宮人拂影坐の柳掃り寸庭を焚 全

掘く全まゝくい帯小くる魅る柳 嘯山

そゝ意塚たゝくけりける柳ふ 吾友

胡くり柳の所あるまはゆるる葉くまひけりける柳 富天

昔後朝のまゝくい柳の後の柳 春き菫梶

形善家察伏兵憐れぬ柳のけりける柳 季遊

曲水角田川やまゝくい柳のけりける柳 樓川

くのまゝくい柳のけりける柳 百萬

反金淵懷古存る根性骨れまゝくい柳 嘯山

柳吉野のまゝくい柳のけりける柳 萬翁

柳江上雜のまゝくい柳のけりける柳 梨冠

風無心是伝と人のまゝくい柳のけりける柳 儿圭

吟九月十一日のまゝくい柳のけりける柳 麥翅

非非昔昔のまゝくい柳のけりける柳

才月原を中の十日才といふことの候中秋清光う邦 孤桐

あつたけの月を鶯賛一ふにね 羅人

あつたけの月を七十小ぬらるる妻一ふにね 淡々

あつたけの月を慈母喪中一ふにね 盛住

あつたけの月を安倍暗明の加治せりり神後鬼毒酒と一ふにね 魯雲

あつたけの月を久ふとをいふさけりりさけりり書いふ一ふにね 嘯山

頼光山入圖

首途や尾花まての末まの末まの末ま 雅因

美し月まの末まの末まの末ま 芋秀

芳お肥氏の叙よりとてく画別の末まの末まの末ま 全

瓢甲戸よりとてを藤原とてまのの長孫とての末まの末まの末ま 全

松松の末まの末まの末まの末ま 羅嵐

先凡雅先をいふことの末まの末まの末ま 正以

心心の末まの末まの末ま 舎來

心心の末まの末まの末ま 舎來

懐石の古くの水を新し月行脚宜中

嘯山老母と懐石と上山橋二柳

雨より小口号草花やみゆし傘も素なる可幸

後物花雪花雪

旅中送人千梅

文章をよめる全

粒々皆辛苦青魚

別舟小祥忌全

木曾路蓼太

快気瓢水

石宝殿全

月輪奉納臘扇

洛北浅野稻荷に美士の塚あり雁宕

流落遊童安寺全

鳴かぬ秋史ハおのひじらんこをり

道所なるおとまへて素堂其角とまふ全

向ふふとむとむと照射符 全

や白川の辺を道遙し  
雁宕

白拍子賛  
水干もねと兼く小てふふ  
全

塞上曲  
胡笳あけかえり花より声の花  
嘯山

李益よりぬりて友よ示す  
旗鳥のことしくくを袖の月  
黒露

細川公の途とえりし  
し川を今や杖藜の花乃何  
春來

長興寺本堂  
まゝのくつはほなく燿はほ  
全

先師青蛾居士と悼  
あゝ涙の目口へいりるあまのふ  
全

医師文義亭より  
常々とんそつはまわれまのま  
存義

祇園ゆりよ参す  
うらみは百合茶をいれし業一癖  
全

少年行  
まを小毒野りん夕は  
百萬

花をむすむ夜の鞭や廊を  
孤桐

鞭提く壳退まぬさう陰  
習先

虚を傳ふ忍れ侍のま宗  
赤羽

浩神  
室引やどれ結んくるふや  
李流

後  
うらみはまはらそく何れも  
習先

俳言集選



うゝ尻儀子尻去此不遠に方た裕之房

仲上巳とある月生三十日のとやさるは一声とすうや芦の下龍眠無名氏

雛丹次掛尾峠盃葉後葉ハスルカ五スルカとスルカなスルカりスルカ

惜丹次掛尾峠古丹次掛尾峠一丹次掛尾峠と丹次掛尾峠終丹次掛尾峠と丹次掛尾峠や丹次掛尾峠な丹次掛尾峠り丹次掛尾峠

波丹次掛尾峠家丹次掛尾峠を丹次掛尾峠梯丹次掛尾峠四丹次掛尾峠本丹次掛尾峠の丹次掛尾峠王丹次掛尾峠の丹次掛尾峠節丹次掛尾峠

す丹次掛尾峠し丹次掛尾峠と丹次掛尾峠や丹次掛尾峠掛丹次掛尾峠尾丹次掛尾峠れ丹次掛尾峠家丹次掛尾峠の丹次掛尾峠風丹次掛尾峠

又丹次掛尾峠月丹次掛尾峠の丹次掛尾峠や丹次掛尾峠る丹次掛尾峠け丹次掛尾峠ら丹次掛尾峠く丹次掛尾峠は丹次掛尾峠ら丹次掛尾峠り丹次掛尾峠

月丹次掛尾峠を丹次掛尾峠も丹次掛尾峠も丹次掛尾峠も丹次掛尾峠も丹次掛尾峠七丹次掛尾峠光丹次掛尾峠る丹次掛尾峠

川公子行持十三夜雨の十三夜雨ま十三夜雨を十三夜雨岸十三夜雨よ十三夜雨な十三夜雨ら十三夜雨め十三夜雨り十三夜雨 全

大美法の人百果賀輪美法の人百果賀の美法の人百果賀白美法の人百果賀葉美法の人百果賀生美法の人百果賀ん美法の人百果賀月美法の人百果賀ろ美法の人百果賀ぬ美法の人百果賀 全

美美法の人百果賀法美法の人百果賀の美法の人百果賀人美法の人百果賀百美法の人百果賀果美法の人百果賀賀美法の人百果賀

美美法の人百果賀法美法の人百果賀の美法の人百果賀人美法の人百果賀百美法の人百果賀果美法の人百果賀賀美法の人百果賀

美美法の人百果賀法美法の人百果賀の美法の人百果賀人美法の人百果賀百美法の人百果賀果美法の人百果賀賀美法の人百果賀

美美法の人百果賀法美法の人百果賀の美法の人百果賀人美法の人百果賀百美法の人百果賀果美法の人百果賀賀美法の人百果賀

美美法の人百果賀法美法の人百果賀の美法の人百果賀人美法の人百果賀百美法の人百果賀果美法の人百果賀賀美法の人百果賀

美美法の人百果賀法美法の人百果賀の美法の人百果賀人美法の人百果賀百美法の人百果賀果美法の人百果賀賀美法の人百果賀

美美法の人百果賀法美法の人百果賀の美法の人百果賀人美法の人百果賀百美法の人百果賀果美法の人百果賀賀美法の人百果賀

美美法の人百果賀法美法の人百果賀の美法の人百果賀人美法の人百果賀百美法の人百果賀果美法の人百果賀賀美法の人百果賀

美美法の人百果賀法美法の人百果賀の美法の人百果賀人美法の人百果賀百美法の人百果賀果美法の人百果賀賀美法の人百果賀

美美法の人百果賀法美法の人百果賀の美法の人百果賀人美法の人百果賀百美法の人百果賀果美法の人百果賀賀美法の人百果賀



十年前  
浮世は世にあらはれしやあはれなる物ぞ

嘯山

斤桐且元  
流るる岩のわたりて教うとこしきり

全

趙毛鏡  
将紀方よりあくる柳や風の蝶

習先

王昭君  
やる昔の今又柳一園の花

全

同  
かきたそとわちへ裁えん

孤桐

同  
ひそとほほく葉る食ひ

赤羽

同  
海棠の彩色遠くささる

楮林

文雅の附  
三韓王者日本柏也といふ程古く漢代の書

嘯山

春怨  
笑無續守柳のぬや夜まうと

欠作者

同  
二河のる條とゆるる春の瓜

習先

同  
物の比ふは神はつらう茄子

芳室

楚宮詞  
綴くくつ小神んとほろん如扇花

太祇

江干行  
暮くぬハ江の舟よりわたり菰粽

全

竹玄  
倦つとほほをなまめあ

瓜流

春怨  
雨の灯や咽んで夜花の純

竿秋

乙未玄  
刀さくともあはれぬ未開紅

吳郷

戒在色 けり猫人の垢を虫にしる

嘯山

美人色表 嵐よりあつた日の教ふ

麥翅

遊女賛 唯少る此目あしき芙蓉ふ

孤桐

宮詞 合ありてはたまへんさくら

二柗

妻の書と胎子刺ある女うら

百萬

雑 能く身を白粉にそりか

嘯山

賛

けりあやふくねはとハそりか

卯雲

友川子性後賛

少め一日の常はそく菱の水

楮林

大黒天賛

子多ふよるに祝詞と糸をん

雅因

同

精おせんわさくわら石う那

嘯山

孟母三遷圖

若くはも二三度道人と麻の中

吐月

夏一雨後

美しのまふ猫睡せし秋乃香

野右

福祿壽賛

書初よるに石の文あや三の節

仝

謡原のりより孟母おあし

身はしつらう 舞うるよ

宋屋

西行賛

けりあやふくねはとハそりか

京馬

東氏野画  
度原如我昔所願今者已満足のむらさき 小鷹 嘯山

赤羽身如浮雲のむらさき 赤羽 可幸

西湖白龜瓢讚

け瓢や春うらやけ瓢子の水乃と伯倫ら  
多かりとも月ならぬとてはたきもさかり

おたるれ可おしるる 全

琵琶湖  
渡山 全

本来無東西  
出る日やこころしきまをとも月とわき 雅因

画賛  
ひくねくおるるやきりのをれ 大夢

三界無安猶如火宅  
おのむらさきとまゆらむしや地牛 麥翅

鯨牛朝服麟曰  
おのむらさきとまゆらむしや地牛 嘯山

訪隠者不遇  
素のまらぬとまゆらむしや地牛 二柳

自慙  
おのむらさきとまゆらむしや地牛 雁宕

書窗懶眠  
おのむらさきとまゆらむしや地牛 蕪村

有感  
因んをぬ月代や花 一日 嘯山

同  
おのむらさきとまゆらむしや地牛 可幸

赤羽  
赤羽

わよ同んや市小沼れく門籠 孤洲

ふり三番叟やオん花北流能介 赤羽

袈裟御前

桂ころりねたし如樹と依すま 李流

嬰垂裳らりそこの際此の末介 子一

海棠やと宵らりる身あまの光 習先

灯ころりや心とるく代る女而花 赤羽

煩惱即菩提

淫穢やとるあやしく甘く如る 李流

わよ名味暗穢坊入入 穠 孤洲

布袋川渡圖

異々直也依心と意のあまより 文誰

清いを川磯才助のあつてあま 子一

意と指と納と合とす出海り 之房

描捲一日千発句の中く呼吸麻まきんともあるはくけん納豆汁 文誰

あつてまけけりるけりん其の声 蘆洲

南山と大系寂光院と遊ふ

あつたの花をけりや

梅史

あつたりくまじつふりや美人草

嘯山

嘯山武然文臺圃の日  
原の枝に二生ふの藤式

丈石

廿五村又委定宗の白  
はまはるくよゆれく

嘯山

くまはるくよゆれく  
はまはるくよゆれく

龍眠

翁の愛の句よ撫子  
うらまはるくよゆれく

交翅

翁の葉よ撫子  
あつたの葉よ撫子

嘯山

いさやみん  
事よせよ

太祇

風林鐵月落

あつたの葉よ撫子

全

春城無處不飛花

あつたの葉よ撫子

嘯山

賦番太昂

あつたの葉よ撫子

青蒲

幽居

あつたの葉よ撫子

雅因

稲荷山

あつたの葉よ撫子

陶花

西郊夜遊

あつたの葉よ撫子

尺布

納涼

あつたの葉よ撫子

交翅

あつたの葉よ撫子

龍眠

いそ小名のくはうやとする雲の  
まきく見よ国の玉つさ

好玉の結成すよと守思う那 百萬

甘めく袖のまをと若小好と追ん 剡山

月入わいさうよぬくるゝ家あはら 鼓舌

風よとあし甲斐あけし社の香 水翁

はくたのふの眼や有財縁危 子一

鳩の心鳥さるるりおるり船 瓜流

茶酒る人恨しけたりう那 京馬

人の夜中と帯し 秋小り 太祇

不自由なるもあつしよと花り下 全

香のたや我の巨魁小痛るるよ 大夢

去るぬのふれくも紙はあきやとそり 篤羽

昔の川勢守をたのぬははし 宋屋

くらげのんあつしよと那 二柙

をけりえも体しぬ痛る美のあり 廬元坊

非黄新選

二七

人の夜中と帯し

中風うきまゝの毒けりま

老母夜中感遇

貝錦 小あつしよ

浦山と古竹いひりいみを見けつとまきまをて致しき

豊泊渡のち急橋しあがりて

をけりえも体しぬ痛る美のあり





送慶基

不<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>了<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>善<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>多<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>誌

存義

木名治とて戸へ下りけり苗別

よ<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>苦<sub>レ</sub>しく<sub>レ</sub>少<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>誌

野右

加田より

紀伊<sub>ノ</sub>敵<sub>ノ</sub>御<sub>ノ</sub>評<sub>ノ</sub>の内<sub>ノ</sub>や<sub>ノ</sub>都<sub>ノ</sub>布<sub>ノ</sub>苦<sub>ノ</sub>前

它谷

鴨川の眉より遠看し

多<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>雲<sub>ノ</sub>房<sub>ノ</sub>中<sub>ノ</sub>く<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>れ<sub>レ</sub>音

越前

利木一

清室

切<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>な<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>る

関更

妙義山

松<sub>ノ</sub>白<sub>ノ</sub>花<sub>ノ</sub>は<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>紫<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>並<sub>レ</sub>たり

百萬

女中しつりし

美<sub>ノ</sub>妙<sub>ノ</sub>極<sub>ノ</sub>く<sub>レ</sub>雲<sub>ノ</sub>多<sub>ノ</sub>を<sub>レ</sub>わ<sub>レ</sub>り

全

内秘菩薩行外現是声聞

さ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>人の<sub>レ</sub>思<sub>レ</sub>ひ<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>た<sub>レ</sub>乃<sub>レ</sub>下

左釣

同

玉<sub>ノ</sub>子<sub>ノ</sub>あ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>日<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>移<sub>レ</sub>り

赤羽

博奕打

中<sub>ノ</sub>ら<sub>ノ</sub>ら<sub>ノ</sub>ら<sub>ノ</sub>打<sub>ノ</sub>よ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>此<sub>ノ</sub>麻<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>角

習先

田家

る<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>白<sub>ノ</sub>く<sub>レ</sub>折<sub>レ</sub>や<sub>レ</sub>和<sub>レ</sub>調<sub>レ</sub>系

太祇

福永より無庵へはてして沙月豊より

冷<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>も<sub>レ</sub>紫<sub>ノ</sub>と<sub>レ</sub>掃<sub>レ</sub>り<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>毛<sub>ノ</sub>虫<sub>ノ</sub>式

嘯山

禪八

物<sub>ノ</sub>白<sub>ノ</sub>ま<sub>ノ</sub>よ<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>皮<sub>ノ</sub>脱<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>伸<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>れ

萬翁

熱火より

焼<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>金<sub>ノ</sub>お<sub>レ</sub>か<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>極<sub>ノ</sub>の<sub>レ</sub>建<sub>レ</sub>小<sub>ノ</sub>り

行雲

原走の事、特因とて人より西より

斗<sub>ノ</sub>馬<sub>ノ</sub>ハ<sub>レ</sub>首<sub>ノ</sub>色<sub>ノ</sub>切<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>さ<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>言<sub>レ</sub>ぬ

嘯山

才姉女と女ふ燕の春をれなさうね 変翅

け往人と清くは大坂自れもいれふ 春樓

わ岩の山水不整をまきりて谷をぬりてつ及神け神もくや神ねん神山神紀神の神人 野右

紅徳三宅氏ハス〜細路と神録せら  
の餘詩道子も看わうは年古右家  
考述と述〜一と味とまのふま  
中活〜棒上流〜初めり世文統の  
改〜くみ終の精〜きふり〜り  
事生ま〜人又古述〜編述さる〜  
今時の句と輯んの奉わり僕も年未乃  
固〜厚く上と書書の甲也あり〜書いこの  
置〜す加〜り〜り〜流〜る〜後〜の〜書〜也〜一層  
の〜さ〜ら〜す〜ま〜二〜句〜と〜程〜し〜ま〜ら〜は〜ね〜

乞乞ハ志とのみわれのほろれもせき花見引 沙月

て感秋や感秋白のらるや初嵐 嘯山

明和庚寅年五月より早〜川〜と井の  
ろとま〜く〜個果〜く〜世上の路大方〜ら〜り〜不  
又月末の八日は秋の方〜影〜き赤き〜ま〜そ  
く〜影〜き〜ら〜り〜計〜想〜し〜た〜海〜も〜く〜未〜考〜有〜の  
事〜し〜と〜影〜思〜し〜小〜影〜と〜八〜日〜右〜雨〜多〜と〜影〜さ〜ら〜  
は〜曉〜又〜影〜し〜し〜影〜さ〜ら〜の〜さ〜ら〜き〜し〜引〜て〜て  
依〜小〜涼〜し〜を〜あ〜わ〜り〜ま〜れ〜は〜井〜と〜川〜も〜か〜し〜  
ら〜り〜て〜も〜ら〜く〜怪〜死〜況〜の〜巷〜も〜満〜ゆ〜も〜也

結自ら中ね梅れもや野山も流るん 全

大工如月の比雅因さふ家つらうと海くせ遊んとも川去日新 太祖

さきさきの末は初るる小えの竹林  
わらひはぬかきう造りなりあり

径よりふたき高はつよをちあや川 全

尺止れをゆげれたり子小ゆげのま 嘯山

門松の指さるる一三首の月 龍賦

尺拂差我雨居 雅因

古人又斗末はゆとゆ事と嘆きられ  
うりされと農工は又さすさるる屋ねは  
なすはれとすまはるるいゆはあつり  
とも面白る計はあつり

しづみや花のよさを小とつり 嘯山

平安山川之佳麗無如嵐山花開時所  
謂妙于小景者也

上臈のじふ川多やふにを性 全

俳諧新選卷之五 終

俳諧新選

七二終



我れを<sup>江戸</sup>守る心 祇

いづれも<sup>江戸</sup>守る心 祇

お日ぬの力や<sup>江戸</sup>守る心 祇

お日ぬの下甲ぬ<sup>江戸</sup>守る心 祇

お日ぬの釣糸<sup>江戸</sup>守る心 祇

俳諧の姿は人の面のごとくさくさく小窓は  
お日ぬの力やとて守る心やお日ぬは  
四角の用小窓も是れお日ぬは  
お日ぬの釣糸をまゝ守る心

串柿の甘ゆい<sup>江戸</sup>守る心 祇  
珪琳

梅の香や隣り<sup>江戸</sup>守る心 祇

横櫓より父の歌<sup>江戸</sup>守る心 祇

お日ぬの<sup>江戸</sup>守る心 祇

山家集<sup>江戸</sup>守る心 祇

お日ぬの<sup>江戸</sup>守る心 祇

お日ぬの<sup>江戸</sup>守る心 祇

お日ぬの<sup>江戸</sup>守る心 祇

お日ぬの<sup>江戸</sup>守る心 祇  
柀居

つねをそくおくりをいふ

おふ入の裁裁ありかきふり

江戸 咫 尺

大幅はいくまの紙をいふ

同 素 丸

袴をぬくころの友や初

同 宗 瑞

玄園より矢張りて牡丹うね

出石 東 季

海骨や今一桶ハありや

同 遷 ト

秋名の内蔵うそをいふ

僧 大 涌

小園修りとおひまけのふ友人の贈り  
えさやとくハハハハハ

生之脚のたそらまへ舌の船

全

息をきく舌のたそらまへ舌毒人

士 蝶

毒れ唾くまをいふ

楚 古

花あふて夢おらんや

廿三  
高松 古 道

室家おと利れははむる花の書

全

梅はくちやあつ水の

同 古 行

目々お、おとるもいふ

明紙くね風ふれはる

春色の塩草の里や芽は若

元日や未分あよもつげり

祢えんまや梅小書く梅の節

乙比の糸るるけやこれの雲

炭の初うまけけりていふおまの梅は伊  
王宮かうて虎くさぬ村里のたむきそそえ

人ともか人とほや冬ふり

若弁やふくとまはらもまのわき

碓の風の梅れあさるるや采花香

大施和尚

玉里

梅風

行列のすけと梅向く梅の那

谷川や鮎ふとむすろ上

若弁や新も障ふふのひらけ

葦葎と日影を日向く笑ふそり

名も量れ始わやうたむんか

けりりと地産の影も枯れんか

我影とがくも心より小春物

鳥啼日とさ言ふ心おそくか

大塚

雄山

全

乙上

五雲

凹玉

醫風

水

簀山



管也 祝の管をきとむるいん 香杏

輪毒也 障ふおりのみうあや 蘆舟

炊印の流もあらぬ 梅花大坂 枝栖

ゆふかり 小山 雲はけぬるふ 全

山あらしのやま 路をまじりチノ久鳥 鈍鳥

我柳よ 望あきにてのさか子 五鳳

羨まむ 枯くみ 風にし 風積の上 全

よくまきさ 下つまく 羨乃 望きふ 懐居

柳の葉や 焼くく くれくる 草まら 不深フシセ

こころや 梅笑の 伏乃 雪の音 如松京

みそや 又 遠れの 色 田原 式 哥ト同

月枝の 花く 志らる 草の ね 竹宇同

の秋や ぬれ 隙つく 葉 瑞 帰風同

秋あき 咲く 一 わる 筆と 指ひ 山竺同

誕生と ともや ねの 松う 那 山水同

牛 養く 吸ひ けり 花見 丸 百丸同

俳言集選 一之九

抱菴や夏を吹く級まら 同 禽秀

海も徒思と徒方田極ふ 同 都友

されはしと異えと縁の意盡 同 黒人

草の死なふおきく小老 山 山肆

流 東 御 聴雨

日のなかりち小合るはく 平 古鳳

昨日ありく 善 亀石

茶録や能く 同 古舟

七草や 南 卷中

地小つる物 同 簾風

涼とより後 同 榮五

くし 同 白口ハ

老乃林 同 桺糸

三編 同 河求

春 同 三好

お代 同 梅松

谷川よきけのちや在木橋同 蘭風

走らね風乃退由る同 退笑

咲とるの友と笑るる様う那多 竹友

少雀の立せく多 圭山

葦葺の御家八町や菊の花同 魯貢

時鳥いしく同 之園

踊りや父れ好も同 里由

山吹のち同 沙山

糸も線同 一敬

心も春く同 湖流

笈摺の背同 三甫

轡腸濱 桃葉

初大石 士川

父事同 家足

湖同 士巧

賣同 士喬

俳言集 巻一 通カ

多川の今来しきう流し岩礫 曰 亀文

多川の今来しきう流し岩礫 名西条 社中

夕立や 名郡山 魯玉

小庭へ梅庭の 同前 雲岫

却の 同 梅宇

白鳥や 同 其峯

や入や 同 休影

泥棚や 同 季人

お花餅と 名 故角

弓張の 名 蘭夾

松 名 珪山

さや豆の 名 和旦

故 名 其白

苗代 名 驢井

素衣 名 木席

雛 名 康工

伊言集選 進加

化口も八や此物の本可南京 一鳳

之井の百茶店も囁と代りし重、斗雪

新しう解もおろす 後七清淇

おろすハ品ひ者方のの 月京 稻音

出代や里へもくれハ主人歌、其樂

やぬ入ぬ見よしとある塔の内、未人

ふうふ鳥は枝し梅見我、車牧

網もくれあ事や心遊干哉、何有

瓦あふし梅の縁留凍、つたへ、東圃

小空を以焼耐好乃の蓋帯を我、東窗

初年や常と押さきて一城言、梅塙

祇園舎ハより刻る屋留を籠る、金華

藤乃をおのり梅まをかくしけの、寸沙

やとれ表人サツカや小松引、不醉

袂くろ居りしはろさくら丸、楚瀾

をよろて我方をまを牡丹よ、臥山

伊言集選 進加

九

虎猫の日に樹鬱くと膝市李、	虎文
野鼠乃格引やし面北雪、	甘雨
巢まきしそり出汁のを鳥子、	御柳
蛤中名ん紙吹出すは干くれ、	李逵
記つ佐川森くそ秋西の敷式、	鹿向
火加減子人乃海河名巨燧哉、	之尺
月小床持おくれそ涼み多梨、	水華
本院色に甘菜の志度り秋明の空、	柏樹

江戸を玉とそ秋ハ重し一穂蟀、	梅斜
即より身お一つとさふあさ川哉、	紅鶴
美湯ちやよまきそさく輪の女、	之逸
此の <sup>紅川</sup> 西瓜秋中も西今と、	元茂
唐とさくめく我はほく喜は寝所を、	蛇足
下崩やるまきそと聖れうははるあ、	蘇風
味 <sup>口</sup> さくそ森とそ人尊の菊、	止一
喰漢や市か智坊く。肉は神、	化山

他の采く酒をぬ家や庭望也、  
 鶴友  
 煮く人 買くも人なるの故くも、  
 和當  
 田極るるまうく抄やうりうごと尻、  
 漆畝  
 やは七根翁花少也やうとらういれ、  
 季德  
 國風体之えゆる路中や思ひ者、  
 既醉  
 暖えれは産の起れる暑さとの程、  
 不染  
 里れるるや物なきそけり花ん哉、  
 永孚  
 大なる川乃向ひの故多りうれ、  
 維則

采の采やゆもて眠あかす付、  
 來始伏水  
 みーの夜やきんと夜寐の吐きぬ、  
 芭由  
 名原やゆまのめりも程の程、  
 魯哉嵯峨  
 二階てハ緒妻あをうみひかり、  
 里隣  
 分別をさうくくめとー年男、  
 指江  
 月をす所もまげらとらあ雪、  
 牛毛幸田  
 戸と能て野れ風入んおれ声、  
 一實  
 庭一水まきみゆきより露垂れ、  
 其丸ムア

衣柳ふと望る家ありて神多六如素行

脇指はあやうきとき交小彦我江馬杉不曲

云今ややうに喰ひを奪ひ若河原市一和

おのら身も烈し及交雄の羽鳥我佐麻希龍

之身訪男は悦と級あけし佐山有恒

弱州やうの胡あ人乃とあまん長崎春曙

あらしくと日れちうきや長崎祥禾

心より後物うたうる清み哉、  
此后

まじしとや新川やう馬乃泣、  
青祭

不三訪外の女界へ来とれと我譚白鳥朝三

いアし久咳咳一来まらや州の也、  
化龍

本瀟乃と音もやうらうわの多衆、  
有光

着旅中の心一持くまぬ取あるふ念、  
灌圃

推くもの多とくわくえる露これ、  
李上

をいふ多とて中くくくうかきな、  
一鳳

我中れ節とくもくや傀儡沙、  
洪水



角やよふ陽ふかききりりすう、知流

系揚て置て又あぐふ競馬哉、武陵

葦やその人なは油釣向季後ッ田、羅維峯

ゆるまや月のなる白も吊りた、文川

放しそきおちる急ぬきりな、湖上

ぬきりそそ扇ハ敷きりそそ人守、碁山

透る月の松よ逢むとらじあり、李風

大竹乃雪ふ力紙とそ花へけそ、祐之

中地亦欲も工もなるそらり、伏見嘯鳩

尺尺くそ目く白きあけぬりり季、一笑

あふもあや波し果さぬ川さひ、正山

角落て麻ふそあがり紙き程、曾山

尾ふ人やて秋も冬も秋し話、圓之

瓶さふうらる時あや宇治気契、指城

ちれは先是とあはれさうね、萬雅

菊菊してゆきそれそは彼岸哉、鬼終

竹書集 巻二 三

おろろはあまの流きや美多 伏見 鬼文

あまのうらふ枯野のまれ目式 岩水

産敷のうらふて遠る月見式 一虚

去向のて森るを食ややのたけ 一枝

節のまゆをて扱てはかろく入る 二鳳

おれくろの園の風ある田んぼ式 馭有

縁の蝶鳴るをたけハ鳴ふけり 盃遊

庭のあまのまをて知んたむら 富山

あまのまをて流き陰るしあ軒 斜光

氷溜るく切るやまをたむら 湖陸

草のまをてておろしある 枝仙

春惜のまをて残る雨や詩仙堂 秀醉

隠るる 十期 希多のまをて 如巾

余念れく取る様をたむら 蘆舟

階下 武中史 鶴の生血やほくく 鶴里

草 一日計 をてたむら 幾行

もろ

風や春をくゝ家鴨のよつとら もろ 維少

火をまきこゝれ乃森や柳の聲 京三世 盛住

衣袖も思何るは独多の形、 路由

お片とくもまを越守、あやちの衡、 座笑

着あやまをそ園又の連た来り重、 飛雀

壽お所ぬ隠居の中戸や藁島、 笑山

酒をまき中子あやまをり冬露、 風磨

大連へ送ふおくるか、ル野哉、 玉淵

提灯よ白梅入るや築地とし、 美芹

草舟や春の子花と泊りあ、 未光

人魂よはるもさるおつらやあき、 天隣

杭とくし、葛の根もまらるるあ、 馬藜

浮舟も海へはるさしと河、 杉甫

月夜へお路もあやちの裏、 楚椿

おあきとあきもあきれ戸を叩、 華鯨

あきとあきもあきも桂も誘ふ水、 凡童

子乃為の雀のさゝる鳥の乳、 可樂	此二つ早まれも白や、 櫻口	望むがや、少きる石のつぼね、 蕪明	鐘乃を耳、余故子之りす、 綺鳳	大も和志、とる奥に松の声、 儿岩	初也如まの、庭り、 有里	寺に、高松か、涼、 如風	雪に、しりし、 文杏
---------------------	------------------	----------------------	--------------------	---------------------	-----------------	-----------------	---------------

京

書林

寺町二条下凡

野田治兵衛

室町中立賣上凡

橘仙堂善兵衛

